



銀座フレンチ

「やっぱり早番はお店混んでなくて最高だよな」

今日も麻美はテンションやや高めだ。ドレッシングをかける仕草も。麻美が好きな、クレソンとミョウガのフレンチサラダ。

「ちゃっかりしてるよ。どうせまたフッチーに替わってもらったんでしょ」

奈々子は麻美とは視線を合わせないが、効果的な表情で指摘する。片方の眉を少し上げて、口元も実にニヒルで女にしておくのが勿体無い。いや、人を見つめる事より、見られる事に慣れた女の顔かもしれない。一方の麻美も、奈々子を半分だけ無視する時が多い。

「だあって、フッチーが一番頼み易い～！テラちゃんはいいなあ、優しい彼氏で」

望は苦笑する。麻美は分かり易い生き方してるよねと思う。麻美こそいいなあと言えたら、それこそいいのに。

「カッコイイ男はワガママだって、結婚で学習しただけよ」

「早々と結婚して結局離婚すると思わなかったよ～。ずっとテラちゃんって呼んどいて正解だった！」

奈々子は、フォアグラサンドを食べる手を止めて、二人とも相変わらずだと思う。そして、自分も自分でしかいられないと思う。ぱっさりショートにした望は、それも結構可愛い。バックは細かくカールさせて、前髪は眉上。ちょっとハート型のフェイスラインに合っていると思う。フォークとナイフを器用に扱って、穏やかにフィレステーキを食べている。

ここは、銀座のフレンチレストラン。ランチも手を抜かないので三人は気に入っている。白い布のテーブルクロスとナプキン。他の会社の友達に言ったら、昼に3500円も出して？と言われる事が多いので、飲み物代は別だとは言えない、、、。安くて美味しいと信じてるんだけど、、、。

「確かに。30前に同期がバタバタ結婚して、麻美と私しか残らないと思ってた。ま、テラちゃんは真面目過ぎて事」

望は、今度は大きな笑顔になってしまう。奈々子って、どうして何でも口に出すんだろうと思うから。

「ハイ、ハイ。つまらない女でゴメンナサイね！」

サイコロステーキ

「手羅クン、今日お昼つきあいなさい。夏こそしっかり食べなきゃダメだぞ」

望は、課長に誘われて断る訳にはいかないが、嬉しいとは言えない誘いだ。神山課長は、仕事は社内一番だが、厳しさも一番。けむったい、、、。父親が既に他界している望は、薄っすらと神山を慕っていない事はないけれど、「ボクって、手羅クン達から見たら、お兄さん？おじさん？」と聞かれた時に、お兄さんだなんて図々しいと思ったのが顔に出たらしく、神山が黙り込んだ時から余計に気まずい。個人的に誘われるのも初めてだ。平静を装っていたけど、離婚して落ち込んでいるとでも見られていたかな。

いつになく多弁な神山と路地を歩く。自分達の制服が、この辺りでは認知されていると分かっているけれど、所詮は制服。奈々子や麻美と一緒にじゃないと居心地が悪い。ああ、私、またつまらない事を気にしてる、、、。

神山が、ここだよと言った店は、ステーキハウスだった。一步店内に入ると、お腹が空く肉の焼けるにおい。鉄板をコの字に囲むカウンターに神山は掛けた。シェフが二人で肉を焼いている。一人が軽く神山に会釈した。

「来月からのプロジェクトに外注会社が入るのは知っているね？」

「はい、それ自体も今回の試みだと伺っています」

「株式会社サムシングから、チーフの笹木クン以下二名が私達システム一課に来てくれる、、、。それで、これは私の一存なんだが、、、手羅クン、彼らの世話係をしてくれないか」

「私ですか！！！？あの、、、それにすみません、、、お世話係とは具体的に何を？？？」

「これまでプログラムの作成応援は社内に頼んで来たので、互いに戸惑う場面もあるかと思う。双方気持ちよく仕事の効率が上がるように手伝って欲しい。我が社の社員は大手という事でプライドが高く、時にお子様だ。今回のプロジェクトに幸い納期は無いが、私達には通常業務もある。笹木クン達に、むしろ協力するという意識の社員がいなくては、彼らの仕事ははかどらないし、プロジェクトも遅れるだろう」

課長の申し出は、打診ではない。それが、会社というものと望は観念した。シェフがサイコロにカットしてくれたステーキは、いい肉だった。大根おろしは分かるけれど、醤油を使ったタレの深い味は、家庭じゃ再現できないな。ご飯もピカピカで美味しい。だけど、課長と食べてたら、胃もたれするかもしれない、、、。

朝食はコーヒーだけ

「あ、、、マズい、、、」

今朝の望は胃が痛んだ。どういう訳か毎朝吐き気がするの、歯磨きが辛い望だったけれど、コーヒーは眠気覚ましに欠かせない。胃が心配でも、欠かせない。高校が家から遠かったので、朝ご飯を抜くようになって、大学では必要性を感じなくなって、会社員になってからは銅ポットを使ってドリップ式でコーヒーを淹れている。今日は、株式会社サムシングの外注さん達が出社して来る日だ。胃の機嫌なんか取ってられない。

望は、この部屋が気に入っている。一階には大家さんが住んでいて、二階は南側が望だけ、北側に感じのいい若い男だけが住んでいる。屋上に布団を干す事も可能だ。玄関を入ると狭いけれどダイニングキッチン。右手のドアを開けると洗面所。洗濯機はそこに設置してある。その奥は浴室で、右手がトイレ。今時ユニットバスじゃない部屋なんて贅沢だと思う。6畳一間だけれど、押入れもたっぷりしているし、畳の大きさもマンションより大きい昔サイズだ。東の窓は、隣家が目と鼻の先だけれど、南はキッチンも和室も開け放っていても問題ないし、西側は使われていない駐車場。会社の先輩から、さいたま県板橋区とからかわれたが、さいたま県民にも板橋区民にも失礼だと思う。通勤は、有楽町線1本で楽だ。痴漢もないし。少なくとも今の所、、、。

「ただいま、ご紹介にあずかりましたチーフの笹木文人です。3ヶ月という短い期間で精一杯結果を出せるように頑張りますので宜しくお願い致します。こちら、倉田と平川です。共に宜しくお願い致します」

ササキアヤトさんと、クラタさんと、ヒラカワさん。望は頭にしっかり刻んだ。顔合わせは、課の者だけだった。課長は望を世話係だと皆の前で言わなかった。目立ちたくない望は有難かったが、勝手に出しゃばっていると勘違いされたら困ると思った。自分、どこまで気が小さいんだ、、、。

社員食堂内カフェ

「テラちゃん！ここ！」

麻美がざわつくカフェコーナーで伸び上がって手を振っている。

「トラブル？」

奈々子は、いつものホットサンドとコーヒー。ここは、社員食堂の一角のカフェ。メニューは少ないけれど、余りに様々な料理のにおいが混じったエリアよりはました。ホットサンドも耳まで美味しい食パンを使ってくれているし。

「違うの。外注さん達を一応業務部に案内してたの」

「ふ～ん、、、。怪しいのっ！あのチーフ、テラちゃんのタイプだもんね！」

麻美は、時々ホントに幼稚でムカつく。小柄で童顔。ルーズにまとめた明るい猫っ毛。まだ実際に10代の子供なのかもしれない。

「やめてよ！お世話は仕事よ！神山課長にちょっとは見込まれているのかなあって、そっちが嬉しいの！」

奈々子は、ここではいつも肘を付いて食事する。ユル～い声で割って入る。

「テラちゃんみたいな女って、デキる男に好かれるのよね～」

麻美は、なんだか面白くない。この会社に入社できたはいいけれど、学芸会でセリフが一言しか貰えないみたいな？？？

「奈々子がモテないのが七不思議なの！私にしたら二人とも羨ましいよ。私これでも結構女子大の時は合コンでも人気あったのにな」

奈々子は、モテないというより、男子社員をスルーする。女子にも容赦ないし、、、。

「うちの会社の男は、しっかりした女が好きなんだよ。それに、ぶりっ子が似合う歳でもないじゃん」

安物のお茶を美味しく

夜9時過ぎのエレベーター前。給湯室から出て来た望は、笹木とバッタリ会う、、、。

「あ！お疲れ様です！」

「わ、びっくりした！いえ、すみません。まだ女子の方が残ってると思わなくて」

「ノロマなだけです。残業の後、洗いお茶を飲んで帰るの、習慣なんです。自販機のお茶じゃ量が多くて。見なかった事にして下さいね。それより、笹木さんこそ毎日遅くまでお疲れ様です」

「コンピューター会社ですから早い方です。二人には残業させないようにしています。人件費を抑えるのも僕の仕事の内ですし、、、。でも、二人の方が先輩なので負けたくない気持ちもあって、つつい、、、」

「色々、ご苦労がありますよね」

「いえ、いえ、僕なんか！それより手羅さん、時々お茶を淹れて下さってありがとうございます」

「来客の時、課長にもお淹れしていたので、サムシングの皆さんも喜んで下さるかなあと思ったものですから、、、」

「手羅さんには本当にお世話になります。今後とも宜しくお願いします」

笹木は、深い礼をして去った。おそらく、もう少し残業するのだろう。望が幾ら頑張っている、男子社員は尚残業している。仕事は片付ければ片付ける程、新規で入るのだ。

銀行系のせいか、不景気も望達には感じられなかった。でも、、、と望は思う。とっても保守的。今度の暑気払いのビアパーティー、サムシングの3人は呼ばれないのだ。会社の福利厚生費で行うものだからだとかなんだとあって、、、。みみっちい、、、。

お茶は、緑茶だけだ。総務部が管理している。どうみても安物のお茶。望は、来客があると誰に言われたわけでもなくとも給湯室に立つ。入社したての頃は抵抗があった。お茶汲み、コピー取りなどは新人女子の仕事だった。必死に仕事に取り組んでいる時に中断させられるのは心底迷惑だったし、差別じゃないかと感じたものだった。朝のデスク拭きもあった。

今は、この安いお茶のせいで会社のイメージダウンにならないように、心を込めて率先してお茶を淹れている。

湯飲み茶碗を先にお湯で温めておき、そのお湯でお茶を淹れる。なぜか成功しているらしい。難しい顔で書類を読んでいる課長にも、そっと出すと「や、ありがとう！」と笑顔になる。

会社で一人になれるのは、給湯室だけだった。

だけど、私、笹木さんと二人きりで立ち話ただけで、ちょっと喜んでいなかったかな？いなかったかな？

ビアパーティー

「手羅望！」

「大川悟！」

この同期一番の女顔の男と、望は縁があった。まだ研修中に帰り道が一緒だったので、途中でお茶していく事になったが、話題の無い彼に望はたちまち退屈した。いつも手羅さんという丘奈々子さんが綺麗だって自分達は噂してる、と学生気分が抜けていないのか、大川はそうも言った。女の前で、他の女を美人と言っててどうする！

以降、望は大川を避けるようにしていたが、去年のビアパーティーとクリスマスパーティー、直前クジなのに同じテーブルになった、、、。そして、これで3連、、、。言葉通りの貧乏クジだ。

「あ、杉山部長、、、お疲れ様です」

「手羅くん、元気そうだね」

人事部の杉山部長は、社員が400人程いるのに名前を覚えてくれている。いつもにこやかな方だなと感心する。

テーブルには、もう一人先客があった。

「はじめまして、、、ですよね？」

「はい」

色白の男は小さな声で答えた。きちんとジャケットを着たままだ。

「えっと、、、モリワキビルの方ですか？」

「いえ、シラトリです」

これでは会話が續かない、、、。が、これで望は彼を知らなくても、オフィスが違うせいだと、つまり失礼には値しないとホッとしていた。残りは3脚。このまま残業で来ない可能性もあった。

今晚は貸切だった。ビールは飲まない望には定かではなかったが、たぶん、ビアホール側はスタッフを増員して対応している。ビールもだが、枝豆も焼き鳥も、何がいいんだかさっぱり分からない。望は、オレンジジュースで我慢しながら、カニの爪の揚げ物を口に運んだ。大川の視線に気付いて、ハッとした。乾杯がまだだった、、、。大失態だ、、、。

「手羅さんって、藤野と付き合い始めたんだって？」

ああ、そっちか、、、。ウザいけど。

「まあ、、、（こんな席で止めてよ!）」

「いつから？」

「2ヶ月前位かなあ、、、いや、もっと経ったかな、、、（それを聞いてどうする!）」

「え？女子って、付き合い始めた日とかって記念日にするもんじゃないの？」

「毎日が記念日ですから～（いい加減にして!）」

「どうぞ、お掛けなさい」

杉山部長の声で顔を向けると、新人らしい女子社員が遠慮して立ったままでいた。3ヶ月みっちり社内研修を受ける望達には、8月はまだ彼らは新人のままだった。良かった、これで大川悟は彼女に任せられるわ。社内恋愛って意外にくたびれるなあ。自分達は一回だけだとしても、私はそっちこっちで同じ事を聞かれてウンザリだって気付いて欲しいわ、、、。夏だし、余計に暑苦し！

デパ地下弁当

「テラちゃん、ロックお願い」

昼をのんびり、小会議室で食べようと言い出したのは奈々子だ。望は、誰かに見つかったら始末書ものじゃないかと反対したけれど、面白い位に誰も来ないので慣れてしまった。会議室のプレート「使用中」にするのは忘れないようにしているけれど、、、。銀座にデパートは多いし、お弁当を見繕うのには困らなかった。会社に戻る時も、望は小心者らしくエレベーターは使わず、地下から4階まで階段を使った。見咎められたら、女子更衣室のソファで食べてる振りでもしておいたらいいと考えていた。麻美がファッション雑誌を読みながら待っていた。

「フッチーの残業、半端くない？」

「うん、、、ちょっとね、、、（毎月100時間越えてるんだよね、、、）」

奈々子は、食事の時はストレートロングの髪を後ろで束ねる。

「私も仕事は前倒しでやりたい方だし残業は多いけど、男子はもっと頑張ってるのを見るとボーナス差があるのかもしれないかなって思うよ」

「けど、うちの課からまた病人出たよ？」

幸い、望の課は今は無事だったが、自殺者も出る会社だ。PCって人間に対して思い遣りが無い。当たり前だけど。

「心療内科？」

「出社拒否」

奈々子は、中華弁当の春雨から大きい唐辛子をつまみ出した。

「フッチーって喫煙室にいるのをよく見かけるんだけど、気を遣うタチだから明るく振舞って痛々しいよ、、、。テラちゃん、その辺りどうなの？」

「そうねえ、、、。ご飯作って待ってあげても、ありがたい朝食食べるねって寝ちゃうから、すぐ疲れてると思う」

「Hなし!？」

「麻美！」

「どうして? 大事な事だと思うけどな」

望は、溜息を飲み込んだ。どうでもいいって思いたい事で、二人が一触即発、、、。勘弁して欲しい、、、。自分の中のもう一人の自分が、誰に向けるともなく呟いた。

「なし、かな」

苦い飴玉

「夏風邪ひいたかな」

まだ、暑さは厳しかった。クーラーが身体に良くない気がするが仕方がない。今日は朝から喉が痛い。望は、甘いミントキャンディーの最後の欠片を噛み砕きながらデスクに向かった。皆の様子がおかしい。談笑していない。理由はすぐに分かった。神山課長が厳しい表情で仕事を始めている。こういう顔の課長には、要注意だ。

「総務から連絡があった。システム一課の電話から国際電話をかけた者がいるとの事だ。私用電話自体慎むのが基本だろう。他の課の社員が使った可能性もあるが、もしこの中に心当たりのある者がいれば、早急に私の所まで来るように」

ビクつく朝礼当番が、課長から何か？と尋ねた時、神山は重々しく突然切り出した。衝撃だった。なんて愚かな事件だろう。けれど、聞いた事も無い嫌な事件だった。本当であった場合、何かしらの処分はあるだろう。

望の課は外線が多いので、喉は大事だったから、飴は黙認されていた。舐めながら電話対応するツワモノもいた。

望は、新しいキャンディーを口に入れた。

「苦い、、、」

初めての味

「申し訳ございませんでした！」

さして大きな声ではなかったが、デスクで仕事をしていた全員が課長席に目を向けた。そして、目を背けた。サムシングのチーフ笹木が、身体が折れんばかりに課長に頭を下げていた。横に立つ倉田は、今にも消え入りそうだった。

「この度は、うちの倉田が大変ご迷惑をおかけ致しました。私の監督不行き届きです。すぐに弊社の方にもこの件報告致しまして、上司からお詫びに伺うように致しますが、まずは私から平にお詫び申し上げます」

「今更言っても始まらない事だが、私も総務部に報告と謝罪をしなければならない。いきさつを話して貰えるかね？」

「申し訳ございません、、、。全く個人的な事ではありますが、倉田には母がありません。母代わりに育ててくれた姉が、この度国際結婚をしたのですが、ハワイの小さな島で寂しい処だとの事です。倉田は、日本を恋しがる姉を心配しまして、、、。そうは言っても、倉田に甘さがあったのだと思います。本当に申し訳ございませんでした、、、」

望は、この痛々しい光景を、これ以上見るに忍びなかった。

「課長、お話し中のところ失礼致します」

「?、、、何かね」

神山の声は怒気を含んでいた。こわい、、、とっても、こわい、、、。

「その日は、サムシングの方達だけ休日出勤でテストを繰り返してくれていました。我が社の社員が誰もいなかった事にも問題があるのではないのでしょうか」

「、、、。まさか、君は私の責任だと言うのかね？」

課長の声が落ち着いてる、、、。こわい、、、もっと、こわい、、、。

「倉田さんがいけないとは分かっています。ですが、私は皆さんのお世話係を仰せつかいました。私が勤務票を見て気付いていれば、、、」

「勤務票は、最終的に私が管理している！君は私を責めているのか？君の方が管理能力があると言っているも同然だぞ！」

他の者が雷を落とされているだけでも、望は毎回充分恐ろしかった。初めて課長に怒鳴られた、、、、。

泣くな！自分！

ご飯はデート？

「おはようございます」

「あ！おはようございます、、、。どうなさったんですか？」

オフィスへと地下入り口からの角を曲がった所で、望は思いがけず笹木に呼び止められて驚いた。笹木は、もう一度会釈しながら、更に近くまで来ると目をしばたいた。

「昨日は本当にありがとうございました。上司に相談しました所、当社内での倉田の将来もありますし、嚴重注意と始末書だけで済みました。本日、上司が、出来うる事でしたら今後も倉田を含め我々にお手伝いを続けさせて頂きたい旨、お願いにあがるとの事です」

「それを私にお話して下さる為に待っていて下さったんですか？」

何時から、ここに立っていたんだろう、、、。他の社員からは、隠れるようにして？いまどき、そんなのって、、、。

「はい、そうです。僕に出来る事が、こんな事しか思いつかなくて。お忙しい入社時間にお呼び止めして、すみませんでした」

「私こそ、神山課長をかえって怒らせてしまってすみませんでした、、、」

「あの、それで、、、僕達が、やはり断られるにせよ許して頂けるにせよ、本日は定時ですみやかに帰る予定なのですが、手羅さんは今日は？」

「私も定時の予定ですが??？」

「良かった！」

笹木は、やっと笑顔になった。

「もし、ご迷惑でなかったら、僕に是非食事をご一緒させて下さい」

「そんな！どうぞ、もうお気になさらずに」

「いえ、違うんです。いつもお世話になっていきますので、機会があればと前々から考えていた事なんです。地下一階のカフェでお待ちしておりますので宜しくお願い致します」

あ、また真面目な顔に戻った、、、。今なら断れる。まだ、断れる。ああ、断れない。だって、声が出ないもの、、、。

カレーには、ナン！

「デートだ、デートだ！」

今日のランチは、インド料理店。麻美がナンを大きくちぎって声のトーンを上げた。

「そんなんじゃないわよ！」

「じゃあ、どうして今日はこちらの同期会だって言わなかったかなあ〜」

イジワルな奈々子は望の目を見ない。

「あんな一生懸命言ってくれてるのに断ったら、男の人に恥かかせるわよ」

麻美も攻撃を止めない。

「フッチーには何て言うの？」

奈々子は、ほうれん草とチーズのカレーにナンをつけて美味しそうに食べながら、やっぱり望の方は見ないで言う。

「私なら、サムシングさん達にとって言っておくよ」

「やましい事じゃないわ」

「年下のイケメンとのご飯が？奈々子には間違いが無いんだから、皆でって言っておきなよ！それより、今夜デートならカレーはマズったね！」

麻美は、ここぞと冷やかした。

「だから違うってば！！！」

*恋と仕事と友情の三角関係！？（本編）に続く